

『仮そめの名を借りて』

橋本匠『ひらがな・仮』は、ひらがなの成立をモチーフとしている¹。橋本は近年、継続して〈イメージと人類の身体の関係〉を制作のテーマに掲げ²、終演後には「即興そのものを表現のシステムとして提示したい」と語った。書家である彼の祖母は、かな文字の黎明期に編纂された古今和歌集を用いてひらがなを教える。習うひと仮名ひと仮名の「綴りの痕跡」を橋本はその身体で探る。そんな「ひらがなの学び直し」を通し、彼はひらがな成立の追憶へ即興の身体で踏み入っていく。だが、果たしてこのときの【身体】とは誰の身体と見るべきであったのだろうか？

即興とは〈その場の感興を即座に詩歌や音楽などに作ること〉とされる³。つまりは「変化していくその場所や、流れていく時間などから感じ得た興味に従って、直感的に生み出される表現」といったところか。なのでその起点、つまりなにがその感興を得ているのか、主体をなにと見立てるかは作品を共有する観客にとって重要である。特に本作は冒頭で祖母と作家の「教える一習う」という関係が音声によって明らかにされる。それを引き合いとした舞台上の身体をなにと捉えるかは作品の根幹に関わる。「我々の祖先」「ひらがなに棲まう言霊」「ひらがなを生まれ直させる現代人」「橋本演じる橋本」。作品をより豊かにするため、明確な意図の下にこういった主体の可能性を複数として関連づけても構わない。事実、ひらがなは手から手へ、連綿と習い感じ綴られることで変化してきたし、その営みはいまも続く。その意味でひらがなは未だ成立には至っておらず、その綴り手が全滅したときようやく完成をみると考えることもできる。日々、ひらがなという名のアーカイヴの維持と更新とを担う我々は、いわば「ひらがな」という芸能継承者である。

だが、「ひらがな継承者」である我々はどれほどそれを自覚しているだろう？ 古今集から千年以上を経た現代人／我々にとって、ひらがなの萌芽へとイメージを向けることは容易ではない。だが、その払暁のときを我々はまだ追体験できる。でなければ、何百万年と祖先が体験してきた日の出を眼前のものとしたとき、なぜ我々はある感慨を抱かされるのだろう。そういった自然現象とともにひらがなを含む芸能、さらに我々の生活はあった。しかし、作家は現代社会において無意識に放たれたそんな理との距離を客観的に図り、作品で越えていく必要がある。我々はなぜ日々ひらがなを綴るのか、綴れるのか。忘却の彼方で佇む我々には、まずそこへの丁寧なアプローチが必要だろう。

ところで先日、日本語を習い始めたばかりの海外の友人から、わたしが綴る【れ】は間違っていると指摘された。その理由を問うたところ、確かに彼のいう【れ】もまた【れ】であっ

¹ 〈KAC TRAIAL PROGRAM Vol.1 DANCE〉 当日パンフレットより

² 同じく 〈KAC TRAIAL PROGRAM Vol.1 DANCE〉 当日パンフレットより

³ 「コトバンク」より <https://kotobank.jp/word/即興-554608>

た。つまり、彼が重要と感じる【れ】の構成要素は、我々が重要と感じている【れ】のそれとは異なっていたのだ。ひらがなを含む言葉は使用者間のイメージの上に成る。橋本は『ひらがな・仮』で、我々という集団がいかに仮としてあり続けてきたのかを、祖母から習う歴史に裏打ちされた深みとともに、流動の可能性をもまた示そうとしたのだと思う。もし未だその自覚が我々に可能ならば、我々という集団はまた新たな地平を選べるのだろう。

(1338文字)

武田 力 (アーティスト、俳優)